

茨城県 常陸太田 ■取材/編集部
 美しい自然と豊かな文化に彩られ、
 水戸黄門が愛した常陸の歴史町



都々逸の元祖

六代目三遊亭圓生は本題の前によつと話す、嘶のまくらの名人だった。そのまくらの一つに、都々一坊扇歌の話があった。概略はこうだ。

常陸太田の医者の子として生まれ、十二歳の時に酒屋の養子に迎えられたが、当人は三味線が弾けて声がいいところから、江戸へ出ることを決意。ところが、すぐに金が底をつき、三味線の流しを始

めた。それをたまたま通りがかつて聴いていた音曲嘶の元祖・船遊亭扇橋から気に入られ、弟子となって都々一坊扇歌の名をもらった……。

扇歌は、愛知県の名古屋で発生した「七七七五」の定型詩に、上方で流行していたよしこの節の節をつけて歌うのを得意としていたらしい。ふるいつきたくなるようないい声と節回しで、扇歌はたちまち人気者となり、音曲も都々逸

の名で全国に広まった。そんなこともあり、常陸太田では毎年十一月、都々逸の元祖・扇歌の功績を称えて、都々逸全国大会が開催されている。

雪村ゆかりの伝統工芸
 常陸太田の文化面を語る上で、もう一人忘れてはならない人物がいる。雪村周継(せつそんしゅうけい)、室町時代末期の禅僧である。が、禅僧と言うより、画僧と言った方がいいだろう。

雪村は現在の太田町で生まれ、常陸太田の正宗寺で剃髪した。絵が好きで、敬愛する雪舟や中国画の画法に学び、時には大胆な省略や、奇異にも思える構成を用いて、独特の画風を確立した。

その雪村が創始者と言われるのが、常陸太田に伝わる伝統工芸「雪村団扇」である。雪村団扇は真竹で作った骨に西ノ内和紙を貼り、馬や、かかし、茄子、水戸八景など雪



村ゆかりの花鳥山水の水墨画を施す。団扇の形は四角で、その図柄、形は今にそのまま引き継がれている。

大正時代は四、五軒の製作者がいたが、今では八十二歳になる環總子さんただ一人。小学生のころから父の手伝いをしていたそうで、この道七十年になる。ご主人が存命中は、二人で年に二千本ほど作っていた。が、今はもう千本がやっとだという。



1



2

① 刃入れの後、骨しぼりという技法で竹を割っていく环さん(茨城県郷土工芸技術伝承者)
 ② 骨は、い草で編んでいく
 ③ 横山大観揮毫による雪村の碑

取材中、何人も人が口にしながら、「鰻屋が喜ぶ団扇」ということだ。一本一本、丹念に作り上げているだけあって、とても丈夫なのだ。その上、西ノ内和紙がまた強靱で、水につけても破れにくいという代物。江戸時代には商家が大福帳として用い、火事の際には井戸へ投げ入れて焼失を防いだと言われる。



名君に恵まれた土地柄

雪村は、常陸太田を本拠とした佐竹一族に生まれた。佐竹氏は、平安時代末期から約四百年にわたって勢力をふるい、豊臣秀吉から五十四万石の領地を与えられていた。が、関ヶ原の合戦後、徳川家康が勝利を収めると、戦に加わらなかった佐竹氏は、秋田への移封を命じられた。

その跡を治めたのは水戸徳

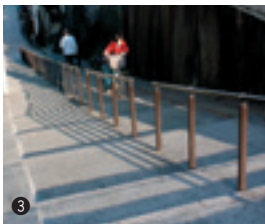
川家であったが、よそ者だった上、税が上がったため領民の評判は良くなかった。ところが何を思ったか、水戸黄門として知られる第二代藩主光圀は、隠居後わざわざ、佐竹氏の本拠地であった常陸太田に西山荘を建て住み着いている。佐竹氏を慕う領民を懐柔するためという説があるが、真偽のほどは分からない。

西山荘は茅葺き平屋建ての

質素な造りとなっている。御座の間と次の間の境には敷居がないのだが、これは百姓町人とも親しく膝を交えて話が出来るといふという光圀の配慮だったらしい。懐柔策はともかく、そんな庶民的な人柄から、領民は光圀を「水戸のご老公」と呼び慕ったようだ。黄門さまの桃源郷づくりさて、西山荘での黄門さんは『大日本史』編さんのかた



①元来は日本酒の蔵元だったが、一九七七年からはワイン造りにも取り組む椚山酒造（〒椚山幸平／TEL〇二九四・七八一〇六一／WEB www.hyama.co.jp）。原料にこだわりのぶどうは自家農園で栽培している。
②創業二百年という老舗立川醤油店（〒立川久泰／TEL〇二九四・七二一〇一〇八／WEB www.sbiglobe.ne.jp/mangoku）。こちらも昔は日本酒の蔵元だった。
③常陸太田は坂の多い街で、景観に趣を与えている。④の十王坂は女子高生の通学路になっており、だいこん坂の愛称で呼ばれる。



わら、山野を散策したり、菓草園を作ったりして、余生を過ごしたようだ。また、光圀は中国の詩人陶淵明の『桃花源記』に感銘を受け、西山荘を建てる時、ここを桃源郷にしようとして、桃の木を植えた。が、桃の木の寿命は二十年だそう、今や桃源郷の面影はない。十数年前、それに気付いて「黄門さまの桃源郷づくり」運動を始めたのが常陸太田ライオンズクラブだ。同クラブは一九六六年、水戸ライオンズクラブのメンバーで結成され、六八年に常陸大宮ライオンズクラブをエクステンション、八〇年には常陸太田ライオンズクラブのメンバーとなつている。また、七五年からは佐竹氏の縁で、秋田ライオンズクラブと姉妹提携を結び、相互交流を実施している。



ふるさとの美しさを再認識した会員たち。この年からいくつかの活動を経て、九四年に委員会を立ち上げている。主な活動としては、平成の桃植え事業、市の花である山吹の植樹事業、県北地域探訪の小さな旅などがある。更に二〇〇一年には結成三十五周年記念事業の一つとして『黄門さま四季の宴―お西山食歳記』を出版している。（鈴）



常陸秋そばの里
常陸太田市は今年十二月、金砂郷町、水府村、里美村と合併する。その一つ金砂郷町は「常陸秋そば」の名で知られるそばの産地。約三百戸の農家が、手塩に掛けて秋そばを栽培している。毎年十一月には常陸秋そばフェスティバルが開かれ、「常陸秋そば蕎麦打ち日本一人名人戦」や、「全国子供そば打ち大会」が行われる。「会」が行われる。新そばは食べ歩きコーナーもあり、各地のうまいそばを思い存分食べ比べることが出来る。